

第88回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2016年10月10日 (月) 14時～17時

兼題「蓑虫」

川井素山 ○流木焚く秋の磯辺や忘れ潮

^{やれはす}
敗荷の一筋臥せる風のあと

蓑虫の蓑を欲しげの糸の先
由緒ある暖炉のひびや秋扇

保井寶正 ○老嬢の手提の子犬秋深し

早慶の校歌塾歌の秋の暮

蓑虫の糸のみ光る月下なる

雨ばかり読書気儘の九月かな

後藤克彦 ○蓑虫やゆらす風にも糸負けず

秋祭りスマホ片手に神輿追ふ

秋湿り空室目立つ奥湯宿

図書館に人影多し秋の夜

佐久間喬 ○台風の進路聞きつつ銀座かな

秋刀魚刺し地酒に添えてささやかに

蓑虫や頭を出さずまま生きて

新蕎麦や酒飲み語る一家言

丸山酔宵子 ○^{あした}明朝には藍も萎れる ^{けんぎゅうか}牽牛花

木綿布に載せて水切る新豆腐

穂の孕み重く波打つ稲田かな

湯気の立つ新米眩し囲炉裏端

菊地崇之 ○螻蛄や剣豪気取り斧あげて

蓑虫や付け接ぎ服はりバイバル

十三夜足取り遅れ車夫 ^{たすく}助

海一面銀の浪路や月明

吉田啓悟 ○七輪の頃の秋刀魚を思ひけり

棚ごしの青空たかく葡萄つむ

蓑虫の風と遊べる余生かな

正座から少しよろけて曼珠沙華

青木英林 ○彼岸花義兄が逝きて七ヶ月
蓑虫や風に揺られて何想う
運動会元気澁刺子等の声
濁り酒一人造りて独り飲む

牧野里山 ○長雨や家に籠りてて蓑虫に
夕暮れのそぞろ歩きに赤蜻蛉
秋晴れに山道に行く我一人
奥多摩の溪谷歩き秋の風

佐久間たか子 ○虫くいの葉脈のこしレモンなる
みの虫の昏れなむとして糸光る
見はるかす稲穂の風に空青し
新米の湯気ゆったりと風のふく

山本草風 ○熟睡し秋の昼寝に蓬莱山
蓑虫も時には空を眺めたし
月眺め邯鄲の夢今茨か
新涼は青き香りの山の息

金森純女 ○回覧板届けうなじのそぞろ寒
夜半風蓑虫うまく隠れたか
芋嵐北へ北へと向かいけり
路穿つ音の途絶えし秋真昼

佐伯兵庫 ○蓑虫のすねて生きてる我が身とも
乙女の声照れるシニアに赤い羽根
肥ゆる秋やせた気がする相撲部屋
朝寒や続く訃報に終活期

渡辺鯨波 ○みの虫や不登校児の連絡帳
鰯雲田舎のバスの時刻表
萩の花伊達三代の肖像画
名月や男看護師脈を取る

次回「萩句会」

日時 2016年11月14日(月)14時～17時

場所 下目黒住区センター第2会議室

兼題 『枯芝』一句 当季雑詠三句 計四句